

T. S. Eliot の John Donne 批評の背景*

——中世への憧れ——

村 田 俊 一

序

Eliot は、1921年の評論“Metaphysical Poets”の中で、Samuel Johnson が形而上詩人たちについて「彼らのところみは常に分析的であった」と非難したのに対して、Donne 一派の弁護を試みて「チャップマンには、特に思考を直接感覚的に捉えたり、思考を感情に作り上げたりすることが見られるが、これはまさにダンに見出だされるものである」¹と述べている。このような弁護は、この評論の2年後に発表された1923年の“John Donne”の中に明瞭に見て取れる。そこで Eliot は言っている。「ダンの精神の構成分子は秩序と調和である。彼の感情の広がりは大いだが、その統一ほど際立ったものではない……それはチャップマンの作品に充満している統一と同じものである。チャップマンにとって、思想は強烈な感情で、その感情は、それぞれ別の感情を持っている思想である」²と。この「統一」こそ、Eliot の若き日の博士論文で扱われた F. H. Bradley 哲学に見られる一元論への傾斜、そして“Tradition and the Individual Talent”の根底を支えている歴史観などに一脈通じるものなのである。このような Eliot の Donne の中に見た「統一」は10年後の1931年の“Donne in

* 本稿は日本英文学会第67回大会（筑波大学、1995年5月21日）で発表したものに加筆修正をしたものである。

¹ T. S. Eliot, *Selected Essays* (London: Faber & Faber, 1966), p. 286.

² T. S. Eliot, “John Donne,” *The Nation & the Athenaeum* (June 9, 1923), p. 332.

Our Time”で「ダンには思考と感受性との間にはっきりとした分裂があった」¹という一文で撤回されてしまう。

このように見るなら Eliot の Donne 批評は、彼の “Milton” 論が、しばしば、最初 Milton を攻撃し、後になって自分の意見を取り消したのとは逆に、最初、Donne を評価し、その後こき下ろして行くという形で要約され、これがそのまま、一つの知識として放置されがちである。I. A. Richards の言葉を使うなら、Eliot の批評論に見られる意見の「逆転と撤回」² (reversals and recantations) である。しかし、一方、Eliot 自身の声に耳を傾けるなら、彼は1956年の “The Frontiers of Criticism” で「詩人たちに関する私の評価は、私の生涯を通じてほとんど変わっていない」³と述懐し、1961年の “To Criticize the Critic” の中では “Milton II” は “Milton I” の「撤回」ではなく「発展」(development) であると言っている⁴。そうは言っても Eliot の発言には、当然のことながら、そのようなことでは捉え切れないものが含まれており、その点が一層重要である。本稿では Eliot の Donne 批評の変化の背景を、彼の中世への傾斜との関わり合いを根底に据えて、1921年から1931年までの間の Donne への言及の系列の中で捉えるとともに、最近 Ronald Schuchard 編纂によって日の目を見るようになった1926年の「クラーク講座」(“The Clark Lectures”) を踏まえながら⁵、彼の詩作品を通して、考察して行きたい。

¹ T. S. Eliot, “Donne in Our Time,” *A Garland for John Donne 1631-1931*, edited by Theodore Spencer (Cambridge: Harvard University Press, 1931), p. 8.

² I. A. Richards, “On TSE Notes for a Talk at the Institute of Contemporary Arts,” *The Man and His Works*, ed. Allan Tate (A Delta Book 1966), p. 8.

³ T. S. Eliot, *On Poetry and Poets* (The Noonday Press, 1968), p. 118.

⁴ T. S. Eliot, *To Criticize the Critic* (London: Faber & Faber, 1965), p. 24. Cf. Shunichi Murata, “T. S. Eliot and Dr Jonhson: Concerning Milton,” *Enlightened Groves*, edited by E. Hara, H. Ozawa, P. Robinson (Shohakusha, Tokyo, 1968), pp. 223-239.

⁵ *The Varieties of Metaphysical Poetry: The Clark Lectures at Trinity College, Cambridge, 1926 and The Turnbull Lectures at the Johns Hopkins University, 1933*, edited & introduced by Ronald Schuchard (London: Faber & Faber, 1933). Cf. 村田俊一訳『T. S. エリオット文学批評選集 一形而上詩人達からドライデンまで』（松柏社、1992）

I

1931年に見られる Eliot の Donne 批評の「撤回」に関して、「感受性の理論」を Remy de Gourmont との関係で論じた F. W. Bateson は、Eliot の1947年の“Milton II”の一節¹を引用して、この事実を認めているものの、「Eliot は、英詩が17世紀にこうむった変化の本質に、その源泉ほどに興味を持っていない」と言っているだけである²。また現代象徴派の立場から「感受性の分裂」(Dissociation of Sensibility)を論じた Frank Kermode は、このことに関して、Rosemond Tuve 女史が Donne を「現代のイメージの詩人であった」とする理論を踏まえながら「エリオットは、1931年の三百年祭に、ダンが廃れることを早くも予言したとき、おそらく、このことを幾分、感じていたのだろう」³と述べているだけである。

Eliot の1931年の Donne 批評の「撤回」を考察するにあたって、先ず Eliot の詩的資質の変化を見ることが大きな鍵になるようである。一般的に言われていることであるが、Eliot は初期の作品において Donne から既に詩人としての感受性や形而上詩の技巧を学びとった。それは、イメージの中に内在された思考と感情の融合の一致、あるいは「対立物の一致」という形で、感受性の分裂を歌った“Whisper of Immortality”の詩を含む1920年の *Ara Vos Prec* の各編や *The Waste Land* あたりに意識的に用いられている。Eliot の17世紀を背景とした Donne の影響は単に技術的な詩作の面だけでなく、“Gerontion”をはじめとして、改宗した年の1927年から書き始められた *Ash-Wednesday* 以降には、

¹ ‘I believe that the general affirmation represented by the phrase “dissociation of sensibility”... retains some validity; but I now incline to agree with Dr. Tillyard that to lay the burden on the shoulders of Milton and Dryden was a mistake.’ “Milton II,” *On Poetry and Poets*, p. 173.

² F. W. Bateson, “Contributions to a Dictionary of Critical Terms, II. Dissociation of Sensibility,” *Essays in Criticism*, volume I, 1951 (Swets & Zeitlinger N. V. Amsterdam, 1965), p. 309.

³ Frank Kermode, “Dissociation of Sensibility,” *Romantic Image* (London: Routledge and Kegan Paul, 1966), p. 147.

Louis L. Martz が *Poetry of Meditation* (Yale University Press, 1971) で展開している黙想の形式という形で、その痕跡が読み取れる¹。しかし、改宗を境にして Eliot の詩は、Virgil を経たダンテ的詩境に加えて Lancelot Andrewes に見られる「純粋な」宗教心と平易で効果的な表現技術を通してダンテ的発想の高見まで昇華されて行くのである。この辺の Dante の影響に関する議論は 1937 年の Mario Praz の “T. S. Eliot and Dante” (*The Southern Review*, Vol. II, No. 4, September, 1937) で明らかにされているところであるが、その背景となっている「中世主義」を見逃すわけには行かない。

Eliot に見られる中世に対する関心は、これから触れて行くことになる「クラーク講座」で明らかになることと思うが、彼の作品を吟味するなら、いろいろなところに跡付けることが出来ると思う。たとえば *The Waste Land* の表題がもともと中世の漁夫王伝説ないしは聖杯伝説に由来していることや、*Ash-Wednesday* に見られる Dante の痕跡、また *The Murder in the Cathedral* で Becket が最初に舞台上に登場した時、口にした例の科白 —「彼らは知ってもおり知らなくもある、行動とは忍従であり、忍従は行動であることを……」(They know and do not know, that action is suffering / And suffering is action...) — に含蓄されている中世の人々を悩ませた「神の予知と人間の自由意志」の問題などは、St. Augustine、Boethius、そして 13 世紀後半の St. Thomas Aquinas などに取り組んだ問題である。もしスコラ哲学の言葉をほのめかしていると思われる詩を見出だそうとするなら *The Hollow Men* 第 5 節に見られる「観念と実在の間に影が落ちる」と歌った以下三連にわたるところなどがある。

Between the idea
And the reality

¹ 拙論「T. S. Eliot の風景について」『英文学研究』第 66 巻第 1 号 (日本英文学会、1989)、pp. 24-29。参照

Between the motion
And the act
Falls the Shadow

For Thine is the Kingdom

Between the conception
And the creation
Between the emotion
And the response
Falls the Shadow

Life is very long

Between the desire
And the spasm
Between the potency
And the existence
Between the essence
And the descent
Falls the Shadow

For Thine is the Kingdom

ここに見られる「観念」と「実在」、「運動」と「行為」、「概念」と「創造」等といった相反する二項対立的なものの間に「影」が落ちるということは、Eliotの宗教的発展から言うなら、懐疑的精神と信仰の兆しを表しているものと見られるが¹、これらの言葉には、実現されず潜在的な特質を持つものと、実現されたものといったきわめてスコラ哲学的なものがある。この二元論を克服せんがために、言うなれば、魂と神の内面的な間隙を埋めるために、祈禱書の「主の祈り」の一行が前後二回にわたって挿入されているのである。

このような Eliot の中世的なものへの傾斜は、逆に Donne の中に近世的要素を発見して、彼の Donne 評価を変えて行く要因となるのである。1926年9月の“Lancelot Andrewes”では、1919年の“The Preacher as Artist”で既に見抜いた Donne の個性 — 「エゴは彼 [ダン] の作品の中で完全な表現となって見

¹ 拙論「T. S. Eliot の Via Media について」『英文学研究』第57巻第2号（日本英文学会、1980）、pp. 178-180。

られないが、人目を盗んだような形でだけ説教に見られる」¹— に触れながら、Eliot は、Donne と Andrewes を比較して「この二人のうち、アンドルーズは中世的だと言っていいだろう。彼は純粹であり、教会と伝統につながっているからである … ダンの方がより近世的である」² と述べている。また、同じ年の12月に書かれた“Sir John Davies”は、1932年の *Selected Essays* には収録されなかったものの、興味あることには「忘却から救われて」³ 1957年の *On Poetry and Poets* に Milton 再評価の論文と一緒に入れられたものであるが、この評論では Davies は Donne と同時代の二流詩人たちより「中世的」であるという理由で、その詩的資質が賞賛されている⁴。問題は、このように Eliot が Donne の中に「中世的」ではなく「近世的」のものを見出だして行く態度が、何故 Donne 評価の変化につながって行くのかということである。この鍵となるのは先ほど触れた“T. S. Eliot and Dante”の著者である Praz との出会いが大きな要因になっているように思える。この出会いは1925年に Praz の『英国における17世紀主義とマリノ風の詩』(*Secentismo e Marinismo in Inghilterra: John Donne — Richard Crashaw*) が出版された時、*Times Literary Supplement* が Eliot にこの本の書評をお願いしたことに始まる。Eliot は、早速、その当時リバプール大学の専門課程の講師であった Praz に手紙を書き、この本に関する自分の情熱を記した。

¹ “‘There is the Ego, the particular, the individual, I.’ Donne was an Egoist, but not an egoist of the religious, the mystical type. Perhaps he was something less important. At all events he was something else; and it was an Ego which nowhere in his works finds complete expression, and only furtively in his sermons.’ “The Preacher as Artist,” *The Athenaeum* (November 28, 1919), pp. 1252-3.

² T. S. Eliot, *Selected Essays*, pp. 351-2.

³ ‘This paper on Sir John Davies which appeared in *The Times Literary Supplement* in 1926; it was rescued from oblivion, and recommended for inclusion here, by Mr. John Hayward.’ “Preface,” *On Poetry and Poets*, p. xi.

⁴ T. S. Eliot, *On Poetry and Poets*, p. 154.

私は、冬の期間ケンブリッジのトリニティ・カレッジでお話することになっている『英国における17世紀の形而上詩』に関する幾つかの講座で、あなたの『英国における17世紀主義とマリーノ風の詩』の本に多く言及するでしょう。私がここで言いたいことは、我々のどんな学者によるどんなものも——センツベリー、あるいはグリアソン、またゴスによるものでさえ——批評的嗜好と判断、そして学識の広さ（強さ）で、あなたの本と比較出来るものはないということです。実際、あなたが幾つかの点で私の先手を打っているということに少しねたみを感じています。それは、ラムゼイ女史に関する批評、ダンとグイドゥ・カヴァルカンティの比較と対象、そして、その当時のイエズス会の重要性を力説した点なのです。こういう点は私にも思い浮かんだのですが、あなたが最初にお話したのです¹。

そして、Eliot は、翌月 “An Italian Critic on Donne and Crashaw” と題して、この本の書評を書くのである。その中で Eliot が Praz を評価したのは、Praz が Ramsay 女史による『ダンの中世的諸教義主義』（*Les Doctrines médiévales chez Donne*）に見られる Donne の詩の中世的要素の読みすぎを指摘した点である。

誰も [ブラッツ] ほど17世紀と13世紀の宗教の間の大きな違いに気づいてはいない。それは心理学と形而上学の違いである。ここで、ブラッツ氏は、また、イギリスのダン批評で目につく欠点であったものを埋め合せることが出来る。つまり、ダンと、ダンテの時代の形而上詩人達との比較である。これは、彼が軽く触れただけで、もっと詳しく調べてほしかった要点である。ブラッツ氏が……行なっているのは、あの学問的な定評のあるメアリ・ラムゼイ女史による『ダンの中世的諸教義主義』という本の行き過ぎのいくつかの修正である。ラムゼイ女史は……ダンの中に中世精神の人間を見る傾向がある。……しかし、ブラッツ氏の、ダンは教育と文学鑑賞において中世的であるが、精神と感受性においてはルネッサンスであるという見方は、ラムゼイ女史よりは的を射ていると思う²。

¹ *The Varieties of Metaphysical Poetry*, p. 10, 58.

² “No one is more aware than he of the world of difference between the religion of the seventeenth century and that of the thirteenth. It is the difference between psychology and metaphysics. Here Signor Praz is able to supply what has been a conspicuous defect of English criticism of Donne: a comparison between Donne and the metaphysical poets of the age of Dante. This is a point upon which he touches lightly, and which we wish he might examine in greater detail. What Signor Praz performs, ... is a correction of

つまり、Eliot は、Ramsay 女史の指摘に対して、中世精神と近代精神の違いを形而上学 (metaphysics) と心理主義 (psychology) の違いであると主張する Praz を支援している。Ramsay 女史が Donne の中に中世主義を読み込む背景の一つには、W. J. Courthope が述べているように、「最近の三世代の間、英国人の好みを色づけてきた中世的感情の復興」があったようである¹。しかし、Donne が中世的精神を持っていたと主張する Ramsay 女史に反対する Eliot の態度は、1927年の “Shakespeare and the Stoicism of Seneca” の中で、Ramsay 女史の『ダンの中世的諸教義主義』に反対して「私にはダンの中に如何なる『中世主義』も、如何なる思想も、認めることは出来なかった」² と言っていることにはっきりと窺い知ることが出来る。このような Eliot の態度は、その後、たとえば 1930年の “Rhyme and Reason, The Poetry of John Donne”³、1931年の “Donne in Our Time”⁴ 等に散見されるが、この辺の考察を真っ正面から展開していったのは、いま触れた “Shakespeare and the Stoicism of Seneca” の中で Ramsay 女史への反論を表明した前の年、つまり、先ほどの

some of the excesses of that scholarly and standard book, “Les Doctrines médiévales chez Donne” by Miss Mary Ramsay. Miss Ramsay is inclined ... to see in Donne ... a man of medieval mind ... But we think that Signor Praz's view is nearer to accuracy: that Donne was medieval in his education and in his taste, but Renaissance in mind and in sensibility.’ “An Italian Critic on Donne and Crashaw,” *Times Literary Supplement* (December 17, 1925), p. 878.

¹ W. J. Courthope, *A History of English Poetry*, Vol. III (Macmillan, 1924), pp. 167-8.

² T. S. Eliot, *Selected Essays*, pp. 138-9.

³ ‘Nor is there any evidence for saying that Donne had a “mediaeval mind”, or that his merit is to have expressed a dualism of mediaeval and modern in his work. He had read a good deal of scholastic philosophy, but not more than any other theologian of his time; and the list of his reading which had been compiled shows of his own time and the generation before. On the contrary, his serious play with ideas seems to be peculiarly modern, and to make him at least as modern as Montaigne; his delight in ideas as ideas, in theories as theories, is anything but mediaeval.’ T. S. Eliot, “Rhyme and Reason, The Poetry of John Donne,” *The Listener* III. 62 (19 Mar. 1930), p. 503.

⁴ ‘That Donne was well read in scholastic philosophy is undoubted; but there is no reason to suppose that he was any better read than Hooker, or that he was so deeply influenced by mediaeval thought as Hooker.’ *A Garland for John Donne*, p. 7.

Praz への書簡に見られる1926年の1月から3月にかけておこなった「『英国における17世紀の形而上詩』に関する幾つかの講座」、つまり「クラーク講座」(“On the Metaphysical Poetry of the Seventeenth Century with Special Reference to Donne, Crashaw and Cowley”)なのである。この「クラーク講座」は、Eliot が「個人的で私的な苦悶」を経験して「人生の最も暗い瞬間」と考えていた頃準備されたもので、その意味で、詩人として転換期となるものである¹。そして、この講座は「知性の崩壊」(“The Disintegration of the Intellect”)という題の3部作のうちの1巻 *The School of Donne* の一部となるはずであった。他の2巻は *Elizabethan Drama* と *The Sons of Ben* という題になる予定であった²。しかし、この講座は“Donne in Our Time”に見られるように、その「テーマが十分に論じつくされていたので、これらの講座を一冊の本にするのは妥当ではないように思われた」³という理由で、今まで決して出版されることはなかったが、この「知性の崩壊」こそが Eliot が1921年に初めて持ち出したあの有名な「感受性の分裂」にかかわることなのである。

II

ところで1921年の“The Metaphysical Poets”で、Eliot は、確かに形而上詩人の流れを英国の伝統のみならず、ヨーロッパの伝統で主流であることを発見しているものの、この詩的精神の崩壊を「17世紀」に「英国の精神に起こり」Milton と Dryden によって悪化したものだと、時間的にも空間的にも限られた領域内で考えている⁴。しかし、Eliot が1947年の“Milton II”でこの発言を撤回

¹ Eric Griffiths, “Boundaries of Love, Eliot’s search for fusion in poetry and in marriage,” *Times Literary Supplement* (July 8, 1994), p. 3.

² “The Clark Lectures” [Author’s Preface], *The Varieties of Metaphysical Poetry*, p. 41.

³ A Garland for John Donne, p. 4. Cf. *The Varieties of Metaphysical Poetry*, p. 25.

⁴ “The Metaphysical Poets,” *Selected Essays*, pp. 286-288.

し、その原因を「英国のみではなくヨーロッパに求めなければならない」¹と言っているが、この撤回の背景には、Eliot が *The Use of Poetry and the Use of Criticism* の中で「ある一時期の詩について十分な理解に到達しようとするならば、我々は、自ずから、はじめ一見したところでは、詩と何ら関係もないと思われるような問題の考察に導かれる」²と言った考えがあるように思われる。この一節は Eliot を注目すべき人物と見ていたケンブリッジ学派の一人である Basil Willey が *The Seventeenth-Century Background* の序文で引用したところでもある。このように、詩を「外部的な標準」によって評価する態度は、Milton を批判した Eliot の立場でもあった³。実際、Eliot が「クラーク講座」の“Donne and the Middle Ages”の中で述べているように、Donne の形而上詩の特殊な型についての定義、見解に達するためには、彼を「歴史の中」に置かなければならなかった⁴。このようなことから当然のこととして Dante の存在が浮かび上がってくる。Eliot がこれまで Dante と形而上詩に触れているところは、先ほど触れた Praz の『英国における17世紀主義とマリーノ風の詩』の書評として書いた“An Italian Critic on Donne and Crashaw”の中に見られるだけである。しかし、Eliot は、ここで Praz がこの結びつきを「もっと詳しく調べてほしかった要点である」と残念がっている。この「クラーク講座」の刊

¹ 'If such a dissociation did take place, I suspect that the causes are too complex and too profound to justify our accounting for the change in terms of literary criticism. All we can say is, that something like this did happen; that it had something to do with the Civil War; ... that we must seek the causes in Europe, not in England alone; and for what these causes were, we may dig and dig until we got to a depth at which words and concepts fail us.' "Milton II," *On Poetry and Poets*, p. 173.

² T. S. Eliot, *The Use of Poetry and the Use of Criticism* (London: Faber & Faber, 1968), p. 76. Cf. '[T]here is something integral about such greatness, and something significant in his place in the pattern of history, with which we have to reckon. And in estimating for ourselves the greatness of a poet we have to take into account also the history of his greatness.' *Ibid.*, p. 88.

³ T. S. Eliot, "Milton I," *On Poetry and Poets*, p. 164.

⁴ "The Clark Lectures," II, *The Varieties of Metaphysical Poetry*, p. 90.

行によって、はじめて Dante と形而上詩の結びつきが本格的に取り扱われたのである¹。

このような立場から考えるなら、この「クラーク講座」の狙いは Dante を柱とした13世紀の中世ヨーロッパの視点に立って、17世紀の詩を批判し、思想の崩壊が存在論 (ontology) から心理学 (psychology) へと、客観的価値から主観的眞実へたどるまさにグローヴァルな歴史観にあったようである。この辺のことを「クラーク講座」の中では次のように述べている。

政治的論争に熱中し窮地にある神学は、中世が甦らせた純粋な考え、つまりギリシャの無私の精神の光を消し去ったが、宗教的感傷を消し去ってはいない。逆に、16、17世紀の宗教的熱情は、自然の加速で急速に燃焼しているのと同じように、それ自身驚くべき激しい熱で燃えている。そして、人間の好奇心は、一方に逸れてしまうと、別な方向に変わってしまう。宗教と神学は、形而上学的眞理を放棄して、17世紀に心理学の方向で展開している。これはブラッツ氏がうまく特筆した修正である²。

つまり Eliot がこの「クラーク講座」で訴えたことは、13世紀から20世紀までのヨーロッパの思想史を中世と近世に分け、この思想史の流れに応じて中世は Thomas Aquinas、近世は Descartes の哲学がそれぞれを表し、これに呼応する文学史では Dante と Donne が代表していると言っていることである。そして、この中世と近世の転換期を17世紀と見ている。これをヨーロッパ的な文学史観に立って言うなら、「ダンテは10頁、ダンは1頁、ラフォルクは脚注」³の分量に相当するもので、もはや Donne は中世の Dante や Guido Cavalcanti ではなくなったということである。中世を代表する Dante の光輝の前に Donne は色褪せて行くのである。

この辺をもう少し纏めて言うなら、Descartes 以前は、ヨーロッパの精神は

¹ 高柳俊一「T. S. エリオットのクラーク講座 ―ダンテと形而上詩の伝統―」『英語青年』(May 1, 1994)、pp. 60-61、参照。

² “Clark Lectures” II, *Ibid.*, p. 78.

³ “The Turnbull Lectures” III, *Ibid.*, p. 290.

比較的統合されていたが、それ以後、感情と思考、主観と客観という形で分裂してしまった。このような歴史観をイメージの立場から述べるなら、17世紀後半に支配的になったデカルト的思考のために、もはや人々は中世的な類比によって認識すること——つまり、知、情、意の各機能が分化する以前の原始的心性である直感に始まる類比的思考 (analogical thinking)——¹ が不可能になってきたのである。スコラ的思考方法は、中世的宇宙観の崩壊と共にその存在理由を失い、思考は単なる道具としてかろうじて存在することになる。Eliot の *The Hollow Men* の言葉をもじって言うなら、神において「本質」(essence) と「存在」(existence) が同じであった中世的な宇宙観に亀裂が生じ、その間に「影」が落ちたのである。まさに「デカルトの世界像がスコラ的世界像にとって変わったのである。」² Eliot はこの統合された感受性を古典主義と結びつけ Descartes の分裂をロマン主義に結びつけている³。

Eliot の関心は、1930年の彼の“Thinking in Verse, A Survey of Early Seventeenth-Century Poetry”でも触れられていることであるが⁴、「視点の相違、つまり、カントが生まれる前の数世紀間に起こった真のコペルニクス的改革、言うならば、古典的なスコラ哲学とそれ以降のすべての哲学の間にある真の深淵を特徴づける相違をはっきり定義すること」なのである。この「相違」

¹ S. L. Bethell, “The Nature of Metaphysical Wit,” in Frank Kermode, ed., *Discussions of John Donne* (Boston, 1962), 136-149.

² Basil Willey, *The Seventeenth-Century Background* (London and Henley: Routledge & Kegan Paul, 1979) p. 85.

³ “The Clark Lectures” II, *The Varieties of Metaphysical Poetry*, p. 80, 84, “The Turnbull Lectures” I, *Ibid.*, p. 262.

⁴ ‘In the thirteenth century such science as existed could be fitted into the theological scheme; the world of thought had an impressive unity; so that one might say that the distinction between philosophers and theologians hardly existed. St. Thomas Aquinas, St. Bonaventura, and even Duns Scotus were philosophers and theologians at once and as one thing. During the sixteenth century two important things happened which are quite distinct. The important point about the Copernican revolution in astronomy is not that it controverted the official astronomy of the Church. It is rather that it affirmed the standing of a separate science.’ T. S. Eliot, “Thinking in Verse, A Survey of Early Seventeenth-Century Poetry,” *The Listener* (March 12, 1930), p. 442.

が生じるのは「デカルトが、精神に刻印される『観念』の印象を蠟につけられた封印の跡になぞらえる時、つまり、彼が我々が知っているのは対象の世界ではなく、これらの対象についての我々自身の観念であるとはっきりと述べるときなのである。」Eliot は、このように述べて、物体が観念に呼応して存在すると推論するのは「蓋然性」(probablement) によってだけだとする Descartes の *Meditation* の第 6 番目をあげている¹。Eliot は、この Descartes の *Meditation* を “Donne in Our Time” の中で再び取り上げて、Donne を Descartes の先駆者であるとして、Donne は「観念の意味を追い求めるのではなく、それを捉え、猫のようにそれと戯れ、弁証法的に展開して、観念の中で宙ぶらりんになっている最小限のそれぞれの情緒を引き出すことである」と述べている²。このような考えは Descartes によって、事物は我々の精神における事物の「表象」においてでなければその事物を知ることが出来ないという主観的観念論 (subjective idealism) へ導かれて行く「認識表象論」(representational theory of knowledge) の哲学に集約されて行くものである³。これは、当然、神秘主義文学の違いによって説明される Dante と Donne の恋愛詩に関係して行くが⁴、それはさておいて、「クラーク講座」第 7 講座で Eliot は、ダンテとダンの本質的な違いを「要約するなら……ダンテにあっては、感情の体系にまさに相当する思考の体系があるのに、ダンの場合は、ただ感情の流れに相当する思考のある種の流れがあるだけである」と言っている⁵。この比較対照は、前に触れたよう

¹ “The Clark Lectures” II, *The Varieties of Metaphysical Poetry*, pp. 80-81.

² *A Garland for John Donne*, pp. 11-13.

³ Mowbray Allan, *T. S. Eliot's Impersonal Theory of Poetry* (Lewisburg: Bucknell University, 1974), pp. 27-32.

⁴ “The Clark Lectures” III, *The Varieties of Metaphysical Poetry*, pp. 93-138.

⁵ “The Clark Lecture” VII, *The Varieties of Metaphysical Poetry*, p. 200. Cf. ‘In Donne we have the metaphysical development of feeling and also the cosmological belief. In Donne we still have a convinced Christian, but the belief is much narrowed in scope; his theological orthodoxy and his personal piety are corroded by a scepticism, not yet explicit, about philosophical truth in general he has no accepted cosmology.’ “The Turnbull Lectures” III, *Ibid.*, p. 296.

に、「クラーク講座」において Dante と形而上詩人がはじめて結びつけられたことから引き出されたものであり、まさに Descartes を通した Donne の近代性を洞察したものである。このように考えるなら Descartes の思想はそのまま17世紀中頃以後の英国の文学的歩みに呼応していると考えられるようである。

Eliot が Descartes について触れられているところはそう多くはないが、その一端は1926年の *New Criterion* に載せた書評の中に見られる。この書評では Herbert Read と Par Ramon Fernandez が対象となっている。ここで Eliot は、彼らを心理学的態度と形而上学的（存在論的）態度の二つの異なる型を代表する批評家として分類し、Fernandes は心理学を存在論に優先させていると言っている。この心理主義優先の立場を、Eliot は「デカルト的視点」(a Cartesian point of view) と呼んでいる¹。Eliot の反デカルト主義は、経験主義的、心理主義的傾向を厳しく批判した F. H. Bradley 哲学を通して、さらに徹底した形で受け継がれたものと見られるが²、彼が「パスカル論」(“The ‘Pensée’ of Pascal”) を書いたとき、Descartes 批判の根拠として Jacques Maritain の *Three Reformers* をあげているところにはっきりと窺い知ることが出来る³。Eliot の Maritain に対する関心は、彼が Praz へ手紙した1925年、フランス南部に出かけ「クラーク講座」の準備の傍ら彼の著作を読み⁴、その後1927年に彼が *Criterion* に Maritain の “Poetry and Religion” を掲載したことに窺い知ることが出来るが、Eliot はこの *Three Reformers* の書評の中で、Maritain は「デカルトは天使的思考の型を求めた人間的思考を感じとっている」と言ってい

¹ *New Criterion* 4 (October 1926), pp. 754-755.

² F. H. Bradley, *Appearance and Reality* (Oxford, 1968), p. 64, 279. Cf. ‘There is, in this sense, nothing mental, and there is certainly no such thing as consciousness if consciousness is to be an object or something independent of the objects which it has.’ T. S. Eliot, *Knowledge and Experience in the philosophy of F. H. Bradley* (London: Faber & Faber, 1964), p. 83.

³ T. S. Eliot, *Selected Essays*, p. 415.

⁴ Peter Ackroyd, *T. S. Eliot* (London: Hamish Hamilton), p. 155.

る¹。Maritain にしてみれば、人間が天使の思惟を持つと考えた Descartes を許すことが出来なかったのである。トマス神学によるなら知の世界と感覚の世界は認識論的に不可分なものとして人間に与えられたのである。ところが Descartes は知を感覚から独立させた。Eliot が Pascal の一節 — 「私はデカルトを許すわけにはいかない。彼はその全哲学の中で、できれば神なしで済ませたいと思った。だが、彼は世界に運動を与えるために、神に最初のひと弾きをさせないわけにはいかなかった。それがすめば、もはや彼は神を必要としない」 — を引用して、「彼[パスカル]はデカルトの失敗したところで成功している、デカルトには幾何学的精神の要素が多すぎるからである」² と言っているのは、反デカルト的立場を典型的に表しているものと思う。Eliot が「パスカル論」を書いたのは改宗後で、当然ながらその Descartes 批判には神学的な視点が含まれている。それは、直接には Maritain の、間接的には St. Thomas Aquinas の思想からきている。Pascal にとって神は、理性が知る存在ではなく、心情が「感じる」存在であった。しかしながら、Eliot は Pascal が頭より心を、理性より非理性を重んじたとは解していない。実際、Eliot は「パスカル論」で Pascal の「心情 (coeur) には理性の知らない論理がある」という言葉を世間で正しく引用されていないことを指摘した上で「パスカルの用語法では、心情 (heart) が本当の心情であれば、それは真に理性的なものである。彼にとって、科学の問題よりも大きく、難しく、そして重要であると思われた神学の問題では、全人格がかかわって行くのである」³ と言っている。これはまさに知性と感性の統合と言うべきもので、この本来の「統合」が如何にして崩壊して行ったのかということ論証しようとしたのが「クラーク講座」なのである。だからこそ Eliot

¹ T. S. Eliot, "Three Reformers," *Times Literary Supplement* (November 8, 1928), p. 818.

² T. S. Eliot, *Selected Essays*, p. 415.

³ *Ibid.*, p. 416.

は Maritain によって Aquinas の神学哲学だけでなく中世ヨーロッパ文化、文学の持っていた秩序と統一性の感覚を、Dante と Aquinas を拠り所として、現代の混沌を理念の面で救出することが出来るのではないかと考えたのである。

III

Eliot が Descartes 以前の統一された Dante を中心とするラテン中世に憧れて行く姿は、英国国教会への改宗の頃に書かれた Dante の濃い影を落としていく *Ash-Wednesday* を境にして、牧歌的 (pastoral) なものを背景に自らを理想的始源状態に回帰させようとする彼の描いたパストラルな風景にも見られる。この辺の分析は *Ash-Wednesday* 第3章の、あやしげなふくらみのついた窓から見られるまばゆい春の景色、第4章の下地となっている Dante の「地上楽園」、また、この章に取り入れられた Dante の言う「高い夢」(the higher dream)、そして第6章に見られる「追憶の風景」などからも窺い知ることが出来る。そして、これらの風景は *Four Quartets* の牧歌的なヴィジョンの場ともなっている木々の間で群れ遊ぶ子供達の「薔薇園」(the rose-garden) への回帰とつながって行く¹。W. W. Creg によるなら、牧歌は本質的に回帰的なテーマを取り扱い、ある意味で歴史の過程を逆転し、その由来からして、一種の願望成就を念願する文学で、感情と思考との原始的形態への回帰のテーマをも取り扱うことになる²。Eliot は改宗を境にして、このようなパストラル・ヴィジョンを Donne にではなくて、Dante に投射して行くことになるのである。そして、この中世ラテンの特質となっている「理想的景観」(The Ideal Landscape) である牧歌的風景は、とりもなおさず墮落以前の楽園を暗示している。この墮落以前の楽園においては、当然のことながら、「名付けること」(naming) と「認

1 拙論「『薔薇園』への回帰 —T. S. Eliot の『子供』のイメージを巡って—」『文経論叢』第30巻第3号 (弘前大学人文学部、1995)、pp. 93-112。

2 W. W. Creg, *Pastoral Poetry and Pastoral Drama* (London: A. H. Bullen, 1906)

識すること」(knowing)は実質的に同じ行為なのである。Eliotが“Swinburne as Poet”の中で言っていることであるが「言語は健康な状態にあっては、その対象物を提示し、言語と対象が見分けがつかないくらい対象物に密着しているのである」¹。この辺は、「創世記」2章、10章、11章、また、古典的典拠としてJohn Miltonの*Paradise Lost*の第8巻(11. 349-54)に見られる例の鳥や獣に「名を与え、彼らの性を知り分けた」などをあげることで論じられるところである。Eliotにとって「我々は事物が(エデンの園の動物のように)さまよいながら名前に出会い命名されるのを待っていることを空想するように、そのように、名前が私たちの頭の中でさまよいながら事物を待っていると空想してもよいのである。」²最も高度な詩的イメージは、Eliotが形而上詩の定義で使った言葉を使うなら、あたかもキリストの受肉のように「一瞬、肉の痛ましいあらゆる喜びで抽象性を纏うこと」³なのである。彼は、言葉と物のどちらが一方に先立つとする立場はとらなかった。つまり、Eliotは主体(主観)と客体(対象)との二分法を前提とすることを否定しているのである。彼の“*Ulysses, Order, and Myth*”に見られる神話に対する関心は、Eliotの「感受性の分裂」の理論、文化の崩壊に関する有力な理論と密接に関係していることは明白であるが、この中で興味あることはW. H. ThackerayのSwift批判に対して、EliotはSwiftの“A Voyage to the Houyhnhnms”の結論は「人間精神がこれまで獲得した最も大きな勝利の一つ」⁴であるとしてSwiftを弁護しているが、これは単にSwiftのペシミズムの問題だけでなく、フーイヌムの言語の中に*Gulliver's Travels*第3巻5章で紹介される「ラガードー学士院」(the Grand Academy of Lagado)の言説に関する一連の企画の背後にある当時の人工的国際語、いわ

¹ T. S. Eliot, *Selected Essays*, p. 327.

² T. S. Eliot, *Knowledge and Experience in the Philosophy of F. H. Bradley* (London: Faber & Faber, 1964), p. 135.

³ “The Clark Lectures” I, *The Varieties of Metaphysical Poetry*, p. 55.

⁴ T. S. Eliot, “*Ulysses, Order, and Myth*,” *Dial*, LXXV. 5 (Nov. 1923), p. 481.

ゆる「エデン語」の問題と何らかの関係があるように思われる。この辺は、17世紀のいわゆる普遍語 (universal language) の試みを行った John Wilkins の *An Essay Towards a Real Character and a Philosophical Language* (1688)、さらには、Umberto Eco の『完全言語の探求』(La ricerca della lingua perfetta) などから興味深く考察されるところであるが、Eliot の内部ではこの「エデン語」への願望が中世ラテン語という形で表れているようである。つまり、Eliot は 1929 年の “Dante” で、Dante の「普遍性」(universality) を強調し『神曲』の普遍性は Dante 個人の産物であるというよりも、彼の時代のイタリア語が普遍的ラテン語から発達した事実から求められるべきであると言っている¹。このように考えるなら、知性と感性の融合を求める Eliot の統一性は、彼自身の内部で喪失したというのではなく、むしろ、その願望が Donne から Dante に、もっと大きな史観から言うなら 17 世紀英国ではなくラテン中世に移って行ったと考えるべきである。この興味の変化は、彼が成長するにつれて Dante に対する志向と共に、彼自身の内部に鮮明に浮かび上がり、それが逆比例して Donne 評価に反映して行ったと考えられないだろうか。Basil Willey によるなら「デカルト的精神は、散文の世界と詩の世界をよりはっきり分離させる傾向を強め T. S. エリオットが形而上詩人以後起こってきたと言っているあの感受性の分裂を促すことになった」² のである。Eliot は Donne の心性の中に、近世的、科学的な論理的思考を見出し、これを批判するようになったのである。Eliot が “A Notes on Two Odes of Cowley” で言っていることなのだが、神学から科学への移行は「思考と感情を分裂し、混同させて行く運命にあるあの進行の遅い病の兆候」³ をこうむることになる。Eliot にとって Dante の詩の枠組みは

¹ T. S. Eliot, *Selected Essays*, p. 239.

² Basil Willey, *The Seventeenth-Century Background*, p. 83.

³ T. S. Eliot, “A Notes on Two Odes of Cowley,” *Seventeenth Century Studies*, Presented to Sir Herbert Grierson (Oxford: At the Clarendon Press, 1938), p. 238.

Aquinas の知性と感覚の調和を基盤にした真実の信仰に基礎をおいているけれども、Donne は「人間の精神が大筋において跡付けることが出来た存在における統一、実在と観念との関係という中世思考の範疇の意味において、信念の人」¹ではなくなってきたのである。Eliot にとって「形而上詩の理論」は「信仰の歴史の理論」(theory of history of belief)²をも含むものである。このようなことから、Eliot は“Donne in Our Time”の中で「ダンには、思考と感受性の間にはっきりとした分裂があった」と述べたのである。

しかし、ここで注意しなければならないことは、Eliot はその文の後にすぐ Donne はその「裂け目を中世的でない彼自身のやり方で、彼の詩において埋めようとした」と言っていることである。Eliot の Donne 批判の根拠は今まで考察したことから見ると、Descartes から導き出される近世的思考であった。一方、Eliot は“Donne in Our Time”の結びで「ダンには常に、英語の数少ない偉大な改革者で守護者の一人であると認められるべきである」と言って彼の業績を称えている。「ダンの改革的な活動は、その前の革命、つまり劇に見られる無韻詩の改革が尾を曳いているうちに行われたので、ドライデンほど直接的にはっきりしているものではない。シェイクスピアの時代にとって、無韻詩は、熱烈な思考を伝える完全な媒介物」であったが「抒情詩は相変わらず楽器や舞台設定に依存している状態であった。」Donne はこの「抒情詩の可能性」を広げたのである。つまり、「エリザベス朝演劇の無韻詩に主に見られる思考と感情の複雑な結合は、ダンと共に、短い、幾分、抒情的な詩へ移行」したのである³。このような一節を念頭に置くなら、Eliot が「ダンには、思考と感受性との間にはっきりとした分裂があった」と言ったのは、あくまでもヨーロッパ思想史の立場からなされたものである。Donne には「中世的ではない彼なりのやり方で、

¹ T. S. Eliot, “Donne in our Time,” *A Garland for John Donne*, p. 8.

² “The Clark Lectures,” VIII, *The Varieties of Metaphysical Poetry*, p. 220.

³ T. S. Eliot, “Donne in Our Time,” *A Garland for John Donne*, p. 14, 16.

つまり、「抒情詩の可能性」の中で、思考と感情の架け橋を見つけようとしたのである。しかし、Donne の特質は、結局「韻律では、歌うことと話し言葉の間を、内容では、思想と感情、そして言葉では、技巧的な言葉と劇的な科白の間をさまよっている」¹ ののである。Donne はまさに「変わり目の一時期を表しているものである」²。

以上のように考えて行くなら、Eliot の詩は、初期において Descartes を根底とする近世的な二元論的世界を孕んでいる Donne から学びとった詩人としての感受性や形而上詩の技巧に基盤を置いたものであったが、*The Waste Land* と *Ash-Wednesday* の架け橋となっている *The Hollow Men* の「影」を乗り越えて、二項対立的なものを包含しながら、自らを存在論そのものを超越した理想的始源状態に回帰させて行く姿へ変わって行く。この Eliot の詩的資質の変化は、そのまま彼の Donne 批評に反映し、17世紀の英国という閉ざされた時間と空間での Donne 評価から、歴史をさかのぼって Dante を柱とした13世紀の中世ヨーロッパの視点に立って Donne を批判して行く、まさに彼の精神的遍歴をそのまま表しているものなのである。

¹ T. S. Eliot, "The Devotional Poets of the Seventeenth Century, Donne, Herbert, Crashaw," *The Listener*, III. 63 (March 26, 1930), p. 552.

² T. S. Eliot, "Donne in our Time," *A Garland for John Donne*, p. 9.

On the Background of T. S. Eliot's Criticism of John Donne

Shunichi MURATA

In his essay "The Metaphysical Poets" in 1921, Eliot found a true poetic ancestor in Donne. According to Eliot, 'there is a direct sensuous apprehension of thought, or a recreation of thought into feeling, which is exactly what we find in Donne.' Indeed, he says: 'A thought to Donne was an experience, it modified his sensibility.'

This earlier enthusiasm for Donne was, however, considerably modified with Eliot's experience as a critic. In "Donne in Our Time" in 1931, Eliot substantially qualified his earlier estimate of Donne. This was one of the 'reversals and recantations' of opinion and statement concerning the matters on which Eliot wrote. It is true that Eliot praised Donne as a reformer of the English language and English verse, but he questioned the value of Donne's philosophic thought. He goes so far as to say that 'there was a fissure between his thought and sensibility.' The essay, "Donne in Our Time," had a serious repercussion on Donne's reputation as a poet.

The change in Eliot's thinking about Donne between 1921 and 1931 is obvious, and is reflected in his poem, "Ash-Wednesday" in which the echoes of Donne give place gradually to the influence of Dante by virtue of the poet's own conversion to Anglo-Catholicism. But the most illuminating

revelation of Eliot's change of estimate of Donne is found in unpublished lectures on metaphysical poetry in 1926, known as "The Clark Lectures," which were recently published as *The Varieties of Metaphysical Poetry* by Ronald Schuchard. This provides us with a view of Donne which differs sharply from that in "The Metaphysical Poets." What caused this change of Eliot's estimate of Donne seems to be the unexpected arrival of a new book for review, Mario Praz's *Secentismo e Marinismo in Inghilterra*, which was sent from *The Times Literary Supplement*. In his review of Praz's book, "An Italian Critic on Donne and Crashaw" in 1925, Eliot pointed out that Praz 'is able to supply what has been a conspicuous defect of English criticism of Donne: a comparison between Donne and the metaphysical poets of the age of Dante.' Furthermore, we find the following in this book review of Eliot:

What Signor Praz performs, ... is a correction of some of the excess of that scholarly and standard book, "Les Doctrines medievals chez Donne" by Miss Mary Ramsay. Miss Ramsay is inclined ... to see in Donne ... a man of medieval mind ... But we think that Signor Praz's view is nearer to accuracy: that Donne was medieval in his education and in his taste, but Renaissance in mind and in sensibility.

Taking the above into account, behind Eliot's criticism of Donne there seems to be his respect for 'medievalism' which is reflected in his later poetry after his conversion. Eliot criticized Donne from the perspective of thirteenth-century Europe, using Dante as his exemplar. In this paper, I would like to discuss the background of Eliot's criticism of John Donne, from his spiritual, philosophical and religious points of view, quoting "The Clark Lectures" and other sources.